〔東洋の人物・動物像展によせて２〕

獅子の文様・獅子の台座

古くから美術作品に取り入れられた獅子（ライオン）の像には魅力的なものが多く、そこに籠められた意味も、獅子の勇猛さに因んだ力強いものがあります。

今日は、その一例である青銅製の獅子形の鎮子（宋時代、高６㎝、図１）と獅子を浮彫りにした銅製の八稜鏡（唐時代、径15.2㎝、重要美術品、図２）（いずれも今回の展示品）の二つの小さな工芸品の中に隠されている大きな秘密をお話しします。

獅子形鎮子（図１）は小像ながら量感に満ち、体軀を少し捻ってうずくまる姿勢で、青銅製の地に目と頭上の一角、背中の脊椎部に金を埋め込み、全身に獣毛を陰刻し、銀の象嵌で魚子（ななこ）文と三つ葉文（図３）を表わしています。更に、肩に陰刻された羽は、頭部の一角と共にこの像が神獣、聖獣であることを示し、中国では漢代に既にその遺例がありますが、源はエジプトやペルシァの神殿建築の門を飾った神獣・霊獣にありましょう。そして、全体に三つ葉文を表わすことは、紀元前4000年紀末のメソポタミアの牛像に溯ります。そこでは牛の黒い斑点を三つ葉文としています。李朝の刺繍では虎に三つ葉文をつけ、獅子としては日本・鎌倉時代の武具の平革の文様や江戸時代の柿右衛門の獅子像にあり、これらは、牛の斑点からどのような道筋をたどったのでしょうか。実は当館の獅子像（図１）は漢代工芸品を真似たものとされており、この三つ葉文は、既に中国の唐の鏡（図３）の獅子（狻猊（さんげい））では、単なる三つの点に退化しているようです（図４）。しかし、この三点文も既に紀元前2000年紀～前1000年紀のイラン北部の銀製ビーカー型杯の二頭の豹に見られ、豹文の混入であるかも知れません。

このような獅子につけられた文様には、更に、梅鉢文があり、李朝の木製獅子像や江戸時代の絵馬の獅子像や、中国の民芸の布に現われた獅子の例があり、梅鉢文には吉祥的な意味合いを感じます。

しかし、獅子の文様として正統なものは、古代エジプトのツタンカーメン王の大理石製枕につけられた二頭の獅子に見られる肩の巻き毛風の文様です。これがメソポタミアからイランに至ると肩と尻部につけられるようになります（田辺勝美『獅子舞とツタンカーメン王の枕の間』ORIENTE１号）。この文様は実際の三才以下の若い雄獅子の首のたてがみの縁にある「毛渦」に基き、「獅子のたてがみ毛渦」（赤木一成「レオポンのタテガミ毛渦」『動物園水族館雑誌』第４巻４号）と命名されています。この文様が、ガンダーラから入って中国雲岡第十六窟（５世紀）の交脚菩薩像の台座両脇の獅子の全身につき（図５）、全身につくようになったのはこの中国からで、下って清時代の陶製獅子像にも見え、わが国の獅子舞の緑色の布にも現われます（田辺氏上記論文及び「獅子舞からメソポタミア・エジプトへ」掛川西高校『研究紀要』20号）。

このことから、元来は若い雄獅子を示し、既に辟邪や守護神の意味を附加されていたと思われる「毛渦」の文様の象徴性は失われ、また他の動物の文様などとも混同されて、上記のような様々な形に変りつつも受け継がれたようです。

実は当館の江戸時代初期の国宝「松浦屏風」の女性が、肩に獅子の文様をつけた衣裳を着ていますが、ここには獅子の毛渦文様は無いにも拘らず、この女性を博多人形（当館蔵）に表わした人形師の中野親夫氏（昭和59年没）はその獅子にこの「毛渦」を新たにつけ加えており、現在の獅子像にもこの文様が続いているのを知ります。

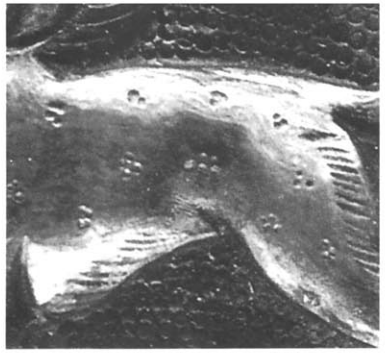
このマークが先述の雲岡の例のように、仏像の獅子座の獅子にまでついているのは珍しく、獅子座は既にガンダーラやマトゥラーの仏像にありますが、ガンダーラではむしろエロスの乗る獅子にこのマークが見られます。

台座としての獅子座も仏像に限ったものでなく、ガンダーラやマトゥラーの初期に当たる１～２世紀のクシャン族国王ウェーマ・ガドフィセスの倚像にあり、最古の例に属する紀元前23世紀のイラン・スーサ出土の女神坐像があり（田辺氏「帝王騎馬牡獅子二頭狩文の成立」東洋文化研究所紀要　第120冊）、更にエジプト絵画の帝王の玉座は獅子脚をつけています。

以上のように仏像の獅子座の起源も遠い西アジアの神や王（又は王権）を守護するための獅子の台座に由来するようです。

中国では仏像の登場以前に虎と龍が神仙坐像の両側に伺候しており、この名残りが初期の仏坐像にも、後の仏座の獅子のように仏像の下方にではなく、両脇に坐る獅子として現われています。

（村田靖子）



4．2図の部分（三点文・複点文）

5．雲岡台座獅子

1．青銅製金銀錯獅子形鎮子

2．銅製貼銀鎏金双鳳狻猊文八稜鏡

3．1図の部分（三つ葉文）

季刊 美のたより №106
平成６年２月17日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.